

序にかえて

水野さんがめでたく古稀の佳齢を迎えられた。本書はそれを祝って、法理論、法律実務の面で彼と共に時を過ごすことを通じて縁の深かった皆さんの祝賀論文集である。

この種のものの序文は概ね執筆者一同の名で認められるのを常とする。私は、おそらく執筆者各位よりも古く、したがって、長い交遊関係にあった故をもって、論文執筆者でないにもかかわらず、この役目を仰せつかったのであろう。

私が水野さんと出会ったのは昭和45年のことであつたと記憶する。当時、私は大阪国際空港夜間飛行差止請求訴訟に深く関わっていた。この訴訟は、わが国で初めての公共交通機関の差止を求めるものであり、困難が待ち受けることを予想はしていたが、始まってみるとその作業は予想を遙かに越える労苦を伴うものであつた。そこで、提訴後間もなく若い優秀な頭脳の持主の参加を求めたところ、これに応じて貰った中の一人が彼であつた。それから拾有余年、常にこの訴訟における中心的論客の一人であつた。環境問題の重要性を実感していた彼は、ほかにも四日市公害訴訟や石垣新空港訴訟にも参加したが、とりわけ西宮甲子園浜の埋立訴訟、後には、輦の浦景観訴訟などにおいて、訴訟活動の中核として活躍されることになる。

水野さんは、訴訟活動を通じて生起する様々な問題についての理論的関心を抱き、あるべき方向について考え、そこでの思索を実務に生かし、その中で更に考えを深めるのである。その成果は関与した訴訟の中でとどまることなく、広く様々な形で生かされ、それは、日弁連の公害対策環境保全委員会での仕事や各地での多くの公害環境問題調査とその報告の中にも結実している。また、その中で蓄積されたものは『環境法学の生成と未来』や『環境法入門』などの編著作としてまとめられ、多くの人に読まれることとなった。更に、そこで得た知見は、大阪府公害紛争審査会の委員、そして、後にはその会長としての職務の中でも存分に生かされた。

水野さんのもとの学問的関心は租税であった。大学卒業後、一旦大蔵事務官となり、国税庁勤務を経験した。それは司法修習生になるまで僅か2年のことであったが、そこでの経験がその後の租税問題の実務、更に研究の機縁となる。

多くの注目を集めることになったいくつかの訴訟を常に納税者の立場から担当し、そのことを通じ、わが国の租税とそれをめぐる訴訟のかかえる多くの問題点に着眼し、考え、それをまた論文や著作にまとめ、そこで考えたことを実務に生かす作業を重ねるのである。その中で生まれたこの分野での法理論上の貢献も少なくない。

水野さんは税務訴訟を通じて、また、住民からの訴訟を経験をする中でわが国行政訴訟の現状にも様々な疑問を抱くようになる。そして、あるべき行政争訟の姿にも考えを巡らせることになった。恰も、その時期、内閣に司法制度改革審議会が設置され、そこでまとめられた意見書の中で、わが国司法による行政に対すチェック機能の強化の必要性が指摘された。そして、わが国の行政訴訟には、内在する多くの問題点があり、これに対応する実体法及び手続法のレベルでの手当の必要性があるといわれたのである。そこで、あげられたいくつかの問題は、その後行政訴訟検討会で議論されることになって、検討会の委員の一人に選ばれ、実務家としての豊富な経験に基づいて行政訴訟を国民にとって使いやすいものにするべく縦横の活躍をされたことは記憶に新しい。

こうしてみると、水野さんは、今日まで、常に市民の立場にたつて法律実務の中で抱いた関心、疑問を起点として思索し、その結果を更に実務に生かし、更に考えを深めるといふ作業をいくつかの分野でくりかえしてきたことがわかる。そしてその成果を論文としてまとめ、公にし、更に立法にも反映させるといふ多彩な活躍の軌跡が明らかになる。

そして、それぞれの分野での思索と経験は弁護士会の委員会活動等を通じても広く生かされることとなった。

それだけでなく、母校を始めいくつかの大学で環境、租税、行政訴訟の講義を担当し、後輩の育成にも力を注がれた。彼は、人生の三分の一は人に育てられ、三分の一は自分のために働き、残りの三分の一は人のために尽くすといふ考えの持主であるが、文字どおり人のために尽くすといふことの実践のかたち

もみえてくる。

これだけ多くの分野で、この四拾有余年の間これだけの仕事を一人ですということ、余人には容易になしえないことで、驚くべき業績である。

本書は、この四拾有余年、水野さんの活動をその側で見、あるいは共に考え、あるいは行動を共にし、不合理を感じると不正を正すために考え行動する彼に敬意を表してきた方々による、彼の古稀への祝意を込めた珠玉の論文集である。

水野さんは、また趣味の人でもある。音楽を愛し、自ら唱い、そして楽器を操る。それだけでなく、苦境にある交響楽団の理事長を引受け、楽団のため奮迅の努力を重ねる。スキーを楽しむため、海外にも出向く行動の人でもある。一時期、アナウンサーになりたいと考えたこともあって、ニュースキャスターとして、その緊張と快感を楽しむ経験もしたともいうことだ。われわれ凡人にとって、この人の一日は24時間以上あるのではないかと思いたくなるほどである。

古稀を迎えても、まだその活力は衰えるところを知らないようにみえる。こうして元気に古稀を迎えられたこともめでたいが、このような多くの優れた研究者、実務家がこぞってその業績への賞賛と敬愛の念をこめてこのような論文がよせられ、それが出版されることは、それに劣らずめでたいことである。これからもご活躍を願いたいというのが一同の気持である。

平成23年9月

滝井繁男